

近世絵画のなかの子供たち

早川 聞多

江戸時代の絵画のなかに子供たちが登場する場面は、割合から見ればさほど多くはないが、その子供たちの描き方によつて、江戸時代の人々が子供に対して抱いてゐたイメージが見てとれる。面白いことに、江戸時代の子供に対するイメージは決して単一なものではなく、大きく分けると正反対といつてもいい二つの見方があつたことが見てとれるのである。一つは理念的な「無垢・無邪気」な存在としての子供であり、もう一つは大人社会と交はりながら生きる現実的な子供である。

子供を「無垢・無邪気」な存在として描いた絵の代表は、いはゆる「唐子図」であらう。「唐子図」とは、中国風の髪型と装ひをした子供たちが様ざまな遊びに興じてゐる図柄の絵で、江戸時代初期にはすでに「唐子遊図」として独立した画題になつてをり、主に江戸時代の絵画界のアカデミーであつた狩野派の画家たちによつて描き継がれてきた。狩野派が描く画題であつたといふことから察せられるやうに、「唐子図」には

ある理念的な意味が附されてゐたのであり、それは「無垢・無邪氣」を象徴する画題であつた。「布袋図」の類型の一つとして布袋が唐子と戯れる図柄が好まれるのは、布袋和尚の「円満相」と唐子の「無邪氣」がよく調和するからである。

また多くの唐子が描かれる絵としては、他に「郭子儀図」といふ画題がある。郭子儀とは唐代の武将で、安祿山の乱の平定の殊勲により位人臣を極め、八子七婿も栄達して子孫に恵まれしかも長寿、したがつて老齡の郭子儀が多くの唐子たち(孫)に囲まれてゐる図は、「家運隆盛」「子孫繁栄」の象徴として狩野派のみならず様々な流派の画師たちによつて描かれた。

このやうに子供を理念的な「無垢・無邪氣」や「子孫繁栄」の象徴として描く場合には、「唐子姿」で描くことが圧倒的に多かつた。このことは「福祥」「吉祥」の図柄が好まれる陶磁器などの絵付に、「唐子図」が多いことと関連があるであらう。

一方、かうした「唐子図」とは正反対に見える子供の描写が江戸絵画の流れのなかにある。それは江戸初期に発達した風俗画とそれを引き継いだ形の浮世絵である。そのなかでも、江戸時代が始まつて間もない京都の町の風俗を描いた舟木本「洛中洛外図屏風」には、実に様々な子供たちの生態が描きとめられてゐる。勿論、父に肩車されたり母に負んぶされた幼子や無心に遊ぶ子供の姿も描かれてゐるが、さうした「無邪氣」な子供ばかりでなく、流行の阿国歌舞伎や人形浄瑠璃の小屋の観客のな

かにも、遊里の風流踊の輪のなかにも大人に混じって楽しむ子供たちの姿が見出される一方、街角には父親とともに俵を背負ふ健気な子供の姿や僧侶に手を引かれた稚児の姿まで描きとめられてゐる。その描写には理想化された子供のイメージなど微塵もなく、現実社会のなかで生きる子供たちの様々な生態がリアルに捉へられてゐる。

このやうな子供の捉へ方は浮世絵の絵師たちに引き継がれ、江戸美術の精華といはれる錦絵のなかにも、無心に遊ぶ「無邪気な子供」から世知にたけた「生意気な子供」まで、実に多彩な子供たちが登場する。なかでも当時笑絵とよばれてゐた春画のなかに、子供がしばしば描かれてゐることは特筆すべきことであらう。春画のなかの子供といつても、決して子供を性愛の対象として描いてゐるわけではなく、「笑絵」の「笑ひ」のための狂言回しとして描かれてゐるのである。春画のなかに登場する子供たちは、大きく分けて次の四つの類型に分類できよう。

一、一歳から二歳のまだ何も事情のわからない無邪気な子供。情況にはほとんど関わりを持たないが、多くは仲の良い夫婦が鬼の真似や玩具で子供の気を外らしながら事を行つてゐるといふ設定で、「大らかな家族」といふ雰囲気醸し出す役割を担つてゐるといへよう。特に前期の春画に多く登場する。

二、三歳から六歳くらゐの子供。周囲の事情が少しづつ見えてきて、その異変に関心を示すやうになり、情況に少し関わりを持つやうになる。二人が「相撲をとつてゐる」とか、姉が男に「いぢめられてゐる」とい

つた誤解が笑ひの種となり、無意識に道化役を演じることになる。前期から中期にかけて多く登場するが、後には思はぬませた科白を口にする子供も登場するやうになる。

三、子供も七歳から十歳くらゐになると事情がかなりのみこめてきて、街角で番つてゐる犬に水をかけて面白がつたり、恋人たちを冷やかしてみたり、姉の逢引を見つけて母親に告げると脅かしたりと、悪童ぶりを発揮する者として描かれる。中期から後期の春画によく登場し、時に主人公となる場合がある。

四、十二、三歳くらゐの少年少女も子供の範疇に入れるとするならば、この年頃の子供たちが春画に描かれる際は、性意識の目覚めと同時に見様見真似で事を試みるといふ設定が多い。当時の早い婚期を考えると、満更絵空事とはいへないであらう。

かうした子供の年齢とその行動の整合性は、江戸時代の常識として受け入れられてゐたものと考へられる。明治になつても、庶民の男の子は十二歳ころには奉公に出る風習が一般的であり、中学卒業ころには大人と見なされてゐたし、女の子は「十五で姉やは嫁にゆき」といふ歌があることなどから考へると、当時の子供は今よりずっと早熟であつたと見ていだらう。そして外書のなかに描かれた日本の子供たちは、類型化した理念的な子供の姿ではなく、おそらく近世の風俗画や浮世絵の絵師たちが見つけてきたと同じ、現実社会のなかで精一杯生きるリアルな子供たちの姿であつたと思はれる。